

b) 主要な眺望景観の変化

(a) 主要な眺望景観の変化

都市計画対象道路事業の実施により主要な眺望景観の変化が生じると想定される主要な眺望点において、フォトモンタージュ法により主要な眺望景観の変化の程度を予想した。

A 太田切川堤防上

本眺望景観は、太田切川堤防上から西方向に景観資源である河岸段丘、中央アルプスを眺望している。計画路線のうち橋梁部・高架部が眺望の中央部分を横断する形で視野に含まれるが、可視の程度は小さい。なお、物理指標による解析結果によると、計画路線は近景に位置しており、水平見込角は133.3度と構造物は目立つ値となっているが、フォトモンタージュによる結果から確認すると、景観資源である中央アルプスや河岸段丘を分断せず、の眺望にもほとんど変化はない。また、仰角は3.4度と圧迫感が生じない角度となっており、スカイラインの切断も生じない。このため、景観資源の眺望を阻害しないと予測する。物理指標による解析結果を表12.12.1-7(1)に示す。

表 12.12.1-7(1) 視覚に関する物理的指標による解析結果

指標	内容
視距離	約 500m
水平見込角	133.3°
仰角	3.4°
スカイライン切断	なし

B 大久保いきいき交流センター

本眺望景観は、大久保いきいき交流センターから西方向に景観資源である伊那峡、河岸段丘、中央アルプスを眺望している。計画路線のうち盛土部が眺望の端部を横断する形で視野に含まれるが、可視の程度は小さい。なお、物理指標による解析結果によると、計画路線は中景に位置しており、水平見込角は93.6度と構造物は目立つ値となっているが、フォトモンタージュによる結果から確認すると、景観資源である中央アルプスや伊那峡、河岸段丘を分断せず、の眺望にもほとんど変化はない。また、俯角は0.4度と俯瞰景観の中心領域から外れており、スカイラインの切断も生じない。このため、景観資源の眺望を阻害しないと予測される。物理指標による解析結果を表12.12.1-7(2)に示す。

表 12.12.1-7(2) 視覚に関する物理的指標による解析結果

指標	内容
視距離	約 690m
水平見込角	93.6°
俯角	0.4°
スカイライン切断	なし

C 大久保ダム

本眺望景観は、大久保ダムから西方向に景観資源である中央アルプス、河岸段丘を眺望している。計画路線のうち盛土部が眺望の中央部分を横断する形で視野に含まれる。なお、物理指標による解析結果によると、計画路線は近景に位置しており、水平見込角は 54.8 度と構造物は目立つ値となっている。また、仰角は 1.4 度と圧迫感が生じない角度となっており、スカイラインの切断は生じない。フォトモンタージュからは、構造物はが河岸段丘は分断しないが、段丘の眺望の下部にで一部重なる状況が見られる。フォトモンタージュおよび物理的指標による解析結果からは、構造物は目立つものと予測され、一部景観資源と重なる部分があることから、景観の構造に変化が生じると予測される。物理指標による解析結果を表 12.12.1-7(3) に示す。

表 12.12.1-7(3) 視覚に関する物理的指標による解析結果

指標	内容
視距離	約 180m
水平見込角	54.8°
仰角	1.4°
スカイライン切断	なし

D 北の城橋

本眺望景観は、北の城橋から北西方向に景観資源である中央アルプス、河岸段丘を眺望している。計画路線のうち橋梁部・高架部が眺望の中央部分を横断する形で視野に含まれる。なお、物理指標による解析結果によると、計画路線は中景に位置しており、水平見込角は55.7度と構造物は目立つ値となっているが、フォトモンタージュによる結果から確認すると、景観資源である中央アルプスや河岸段丘を分断せず、の眺望にもほとんど変化はない。また、仰角は0.3度と圧迫感が生じない角度となっており、スカイラインの切断も生じない。このため、景観資源の眺望を阻害しないと予測される。物理指標による解析結果を表 12.12.1-7(4)に示す。

表 12.12.1-7(4)視覚に関する物理的指標による解析結果

指標	内容
視距離	約 1,540m
水平見込角	55.7°
仰角	0.3°
スカイライン切断	なし

E ふるさとの丘

本眺望景観は、ふるさとの丘から西方向に景観資源である河岸段丘、中央アルプスを眺望している。計画路線のうち盛土部が眺望の中央部で視野に含まれるが、可視の程度はごく小さい。なお、物理指標による解析結果によると、計画路線は遠景に位置しており、水平見込角は16.6度と構造物は目立つ値となっているが、フォトモンタージュによる結果から確認すると、可視部分はごくわずかであり、景観資源である中央アルプスや河岸段丘を分断せず、の眺望にもほとんど変化はない。また、俯角は1.2度と俯瞰景観の中心領域から外れており、スカイラインの切断も生じない。このため、景観資源の眺望を阻害しないと予測される。物理指標による解析結果を表12.12.1-7(5)に示す。

表 12.12.1-7(5) 視覚に関する物理的指標による解析結果

指標	内容
視距離	約 3,300m
水平見込角	16.6°
俯角	1.2°
スカイライン切断	なし

G 原新田地区水田

本眺望景観は、原新田地区水田から西方向に景観資源である河岸段丘、中央アルプスを眺望している。計画路線のうち盛土部が眺望の中央部で視野に含まれる。なお、物理指標による解析結果によると、計画路線は近景に位置しており、水平見込角は144.9度と構造物は目立つ値となっているが、フォトモンタージュによる結果から確認すると、景観資源である中央アルプスや河岸段丘を分断せず、の眺望にもほとんど変化はない。また、俯角は1.3度と俯瞰景観の中心領域から外れており、スカイラインの切断も生じていない。このため、景観資源の眺望を阻害しないと予測される。物理指標による解析結果を表12.12.1-7(7)に示す。

表 12.12.1-7(7)視覚に関する物理的指標による解析結果

指標	内容
視距離	約 220m
水平見込角	144.9°
俯角	1.3°
スカイライン切断	なし

L 伊那市下殿島地区

本眺望景観は、伊那市下殿島地区から東方向を望む生活上の眺望景観であり、河岸段丘を眺望できる。計画路線のうち盛土部が眺望の中央部で視野に含まれる。なお、物理指標による解析結果によると、計画路線は近景に位置しており、水平見込角は179.3度と構造物は目立つ値となっている。また、仰角は3.0度と圧迫感が生じない角度となっており、スカイラインの切断も生じない。フォトモンタージュからは、構造物はが河岸段丘を分断しないが、段丘の眺望の下部に一部重なる状況が見られる。フォトモンタージュおよび物理的指標による解析結果からは、構造物は目立つものと予測され、一部景観資源と重なる部分があることから、景観の構造に変化が生じると予測される。物理指標による解析結果を表 12.12.1-7(12)に示す。

表 12.12.1-7(12)視覚に関する物理的指標による解析結果

指標	内容
視距離	約 70m
水平見込角	179.3°
仰角	3.0°
スカイライン切断	なし

M 伊那市原新田地区

本眺望景観は、伊那市原新田地区から東方向に景観資源である河岸段丘を眺望する生活上の眺望点である。計画路線のうち盛土部が眺望の中央部で視野に含まれる。なお、物理指標による解析結果によると、計画路線は近景に位置しており、水平見込角は125.9度と構造物は目立つ値となっているが、フォトモンタージュによる結果から確認すると、景観資源である河岸段丘を分断せず、の眺望にもほとんど変化はない。また、俯角は0.4度と俯瞰景観の中心領域から外れており、スカイラインの切断も生じていない。このため、景観資源の眺望を阻害しないと予測される。物理指標による解析結果を表 12.12.1-7(13)に示す。

表 12.12.1-7(13)視覚に関する物理的指標による解析結果

指標	内容
視距離	約 210m
水平見込角	125.9°
俯角	0.4°
スカイライン切断	なし

4) 事後調査

予測手法は図上解析による改変の位置、程度の把握、主要な眺望景観の変化を把握するフォトモンタージュ等、多くの実績を有する手法であり、予測の不確実性が小さいと考えられている。また、採用した環境保全措置についても効果にかかる知見が十分に把握されているものと判断でき、効果の不確実性は小さいと考えられることから、事後調査は実施しないものとする。

5) 評価

(1) 回避又は低減に係る評価

計画路線は道路の計画段階において、盛土構造を始めとした道路構造の検討を実施しており、景観への影響に配慮し、環境負荷の~~回避~~低減を図っている。また、環境保全措置として、「法面等の緑化」及び「道路付属物（照明ポール、立入防止柵等）の形状、デザイン、色彩の検討（近景域における影響の場合）」の環境保全措置を実施することで、環境負荷を低減する。このことから、環境影響は事業者の実行可能な範囲でできる限り~~回避~~
~~又は~~低減されているものと評価する。